

## 研究タイトル:

## 小説論、および20世紀後半以降のアメリカ文学

氏名:	大内 真一郎 OUCHI Shinichiro	E-mail:	s.ouchi@maizuru-ct.ac.jp
職名:	講師	学位:	修士(文学)
所属学会・協会:	日本英文学会, 日本アメリカ文学会		
キーワード:	小説論, 20世紀アメリカ文学, リチャード・パワーズ, ウラジミール・ナボコフ		
技術相談 提供可能技術:	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小説の読み方</li> <li>・現代アメリカ文化・文学</li> </ul>		

 研究内容: **小説についての理論**

小説は人類が生み出した、最高に自由な物語形式のひとつです。例をあげましょう。

When he awoke, the dinosaur was still there.  
 彼が目覚めた時、恐竜はまだそこにいた。

これは史上、最も短い小説とされるものの全文です。星新一のショートショート SF と比べても圧倒的に短い。一瞬で読めます。それでいて、このワンセンテンスには物語の可能性がたくさん詰め込まれています。

まず「彼」とは誰なのか。現在の知見では恐竜絶滅後の 6000 万年後に初期人類が現れたことになっています。もしかすると彼は人間でないという可能性もあります(少なくとも男性ではあるのですが)。そして「目覚めた」とあるように、恐竜が近くにいるにもかかわらず、彼は眠りこんでいたようです。定冠詞の“the”に注目すると、恐竜は彼にとって未知の存在ではなく、すでに見知った存在です。さらに副詞の still によって、彼と恐竜のあいだには、何らかのドラマが展開されていたことが示されています。

何があったのか、それはわかりません。何しろ、英訳では8語、原文のスペイン語ではたった7語しかないのです(著者はグアテマラの作家アウグスト・モンテロソ)。この極端な簡潔さを説明不足とするなら、これは確かに失敗作です。そう考える人は、もしかしたら小説とは縁がないかもしれません。逆に、この一文で思わず想像力を働かせてしまった人は、小説読者になれる素質を持っているということになるでしょう。

こんな想像をしてしまった人がいませんか。「彼は未来人の時間旅行者である」アンケートをすれば、こうした解釈が最も多いはず。なぜなら、70 年ほど前に SF 作家レイ・ブラッドベリが書いた有名な短編で登場した「時間旅行」と「恐竜」の組み合わせが、イメージの鮮烈さゆえに、われわれ大衆の想像力にインプットされたからです(直系にあたる『ドラえもん のび太の恐竜』を思い出す人もいるでしょう)。もう一度よく読んでください。この小説には場所や日時を指定する言葉は全くありません。舞台は大阪の京橋で、恐竜はティラノサウルスではなく小型の鳥形恐竜だっというわけ。もちろん、こんな想像はなかなか浮かんでできませんし、「恐竜」に込められたロマンティズムを考えると無理があります。ただし、このような解釈の余地が残された文章であることは念頭におくのが、小説読者というものなのです。

私の専門は20世紀後半以降のアメリカの小説であり、とりわけリチャード・パワーズとウラジミール・ナボコフを中心に研究を行なっておりますが、根源的なレベルにおいては、小説がどのように機能しているのか、いわばメカニズムに興味を抱いています。ご覧になったように、こんなに短い小説でさえ読むには手間がかかります。でも、その先にはきっと、ふだん生活しているときには気づかない、言語による未踏の地が広がっているはず。恐竜だっいてもおかしくありません。

## 提供可能な設備・機器:

## 名称・型番(メーカー)

名称・型番(メーカー)